

編集後記

今年も異常気象が続き、暑かったですね。これからも異常気象は、すでに長く続いていますし、今後もあまり変わりはないさそうですね。そうだとすれば、今後は異常が正常で、正常が異常になると言うことでしょうか。会員の皆さん、お元気ですか。今年3回目の、わが研究所の紀要 *e-Magazine* 第18号ができました。今回も力作ぞろいです。

今回の目玉の1つは、永野慎一郎（当研究所理事、大東文化大学名誉教授）の連載「明治期韓国で活躍した外交官・若松兎三郎の生涯」です。これは5回にわたって掲載され、今回をもって一応の終了となります。この論考は韓国で単行本として出版されます。韓国では出版前から評判となり、いくつかの書評も準備されているようです。詳しくは同論文を見ていただきたいのですが、戦前の植民地時代に若松兎三郎のような人物が存在したこと自体、日本人の多くは知らなかったでしょうし、韓国人も同じだったでしょう。永野教授によれば、若松兎三郎が日本の外交官として韓国に駐在し、主として2つのことで日韓のために貢献したといいます。一つは、韓国の綿作改良への貢献であり、もう一つは、天日製塩を提案したことです。これらは木浦領事時代に熱心に取り組んでいた仕事であり、日本の国益のために発案し、推進したことは紛れもない事実ですが、同時に、日本の国益だけでなく、現地の人々の生活向上のための産業開発と捉え、それが日韓共生のために役立つと考えて行動したということです。では若松とはどういう

人物で、いかなる思想の持主であったかと言えば、若松の思想や哲学の形成過程は青少年時代、同志社学校で新島襄の教えを受け、クリスチャンとなり、人類愛と平等思想に基づく人道主義的精神を持ち、植民地支配下にあった韓国の人々に対しても愛情を持って接していた人物だということなのです。

このように、日韓の歴史的関係に光を当て、日韓関係の重要性、奥深さ、歴史的な絆、と言ったことを明らかにしてくれた、永野教授に拍手を送りたいと思います。この論文は日韓関係がどこの国との関係より重要であり、切っても切れない関係にあることと教えてくれます。こうした人物の存在は我々の誇りです。我々日本人が日韓関係を見るときには、とかく現状に流され、独りよがりの韓国観で判断することは避けたいところです。永野教授の論文はかけがえのない日韓相互の理解と両国の架け橋になることでしょう。

わが研究所の副代表・嘉数啓教授には、特別にお願いして2つの文章を書いていただきました。嘉数教授は長年にわたって、国際舞台で縦横に活躍する研究者です。嘉数教授は幅広い分野でご活躍中ですが、特に島嶼問題では世界でも有数の権威ある学者です。今回書いていただいた論考の1つはそうした嘉数教授のご専門に関わるものです。もう1つの「蔡英文台湾新総統の誕生と挑戦」は先生の文章にも出てきますが、台湾外交部研究フェローとして1年近く台湾に滞在し、台湾各地で公演、講義、共同研究に従事

したご経験に基づいて新総統に就任した蔡英文氏の誕生の経緯や今後の中台関係などについて、専門家としての奥深い意見を述べておられます。こうしたタイムリーな論考は多くの日本人にとって、大変有意義か

と思います。

ぜひ、一読の後、執筆者にはコメントをお寄せくださいますようお願いいたします(朽木)。